

「いやよ」という声

辻 憲男（文学部教授）

届いた手紙を読む。すると、何ということだ、「文字が眼の前で水に溶け去るようにうすれてゆく。追いつかぬように文字の行方を求める。今、このあとを読むことができなかつたら、涼子の心を知る機会は永遠に去ってしまうのだ。早く、早く、今のうちに、大急ぎで残りを読んでしまおうと焦るのに、たちまち手の中の涼子の手紙は空に消えてしまった」。夢がさめると、せつない悔いが胸を浸した。…去年の春、涼子は劇研究会に入部してきた。「髪をうしろで無造作に短く二つに分けて、白い小さなリボンでくくっていた。色白で、眼鼻立ちのきりっとした、賢そうな少女」だった。部長の沼四郎は演技を指導した。涼子の素質と熱心さは目立った。夏の小豆島公演や、大山へのスキー旅行で二人は親密になった。沼は卒業したら東京で俳優修業をするつもりで、婚約を申し込んだ。ところが涼子は就職を強く望んだ、「あたし、共稼ぎなんかいやよ」。涼子の両親からも嫌われた。あげくに涼子は沼を完全に拒絶した。自暴自棄になって高砂の海へ飛び込んだ。気がつくと、東二見の砂浜に流木のように打ち上げられていた。電車代がなく、青田のなかを歩いて家へ帰り着いた（庄野潤三「流木」）。

戦後すぐの新制大学生だから、男女の機微にうとい。軟弱さを知らない無骨な男だ。育ちも生活環境も違っていた。しかしそれだけだろうか。「人間は、一度失恋しなきゃあ、偉くなれないのよ」。涼子の痛棒である。作者の心底は深く、人間というもののぬまのような不可解さを問うているのではあるまいか。



加古川の河口。手紙の夢は小説全体の要約になっている。
詩人伊東静雄は庄野の中学時代の恩師。